

主 題：王を拝みに参りました

聖書箇所：マタイの福音書 2章1－12節

今日、私たちはクリスマス礼拝としてイエス・キリストの誕生を覚えて、そのすばらしい救い主とともに祝い誉め称えるのです。「救い主が生まれた」、この知らせに対する人々の反応は二つに分かれます。ある人々はこの救い主の誕生を心から歓迎し、また、ある人は歓迎をしません。ある人々はこの救い主の誕生を心から喜び、ある人々はこの誕生に関心を払いません。はっきりと言えることは、あなたは確実にどちらかに属しているということです。神であるこの救い主を受け入れて礼拝をささげるのか、それとも、このお方を拒み続けていくのか？

今日私たちは、東方の博士たちの訪問という出来事を通して、礼拝をささげた者たちと、礼拝をささげなかった者たち、この二種類の人々の様子を見て参ります。そして、願わくは、もし、これまであなたがこのすばらしい救い主に礼拝をささげて来られなかったなら、今日がその礼拝をささげる日となるように、あなたが生まれ変わることを願います。そして、もうすでにあなたが礼拝をささげて来たなら、ますますこの主を喜び心から崇める者へと成長してくださることを心から願います。

まず、2章の1節から12節までみことばを読みます。

- 2:1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。
- 2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」
- 2:3 それを聞いて、ヘロデ王は恐れ感った。エルサレム中の人も王と同様であった。
- 2:4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。
- 2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。」
- 2:6 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』
- 2:7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。
- 2:8 そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」
- 2:9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。
- 2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。
- 2:11 そしてその家にはいって、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。
- 2:12 それから、夢でヘロデのところへ戻るなという戒めを受けたので、別の道から自分の国へ帰って行った。

A. 救い主を礼拝した博士たち

みことばはまず私たちに、救い主を礼拝した者たちのことを教えます。つまり、東方の博士たちです。

1. 彼らは救世主を捜し求めていた

ですから、このエルサレムにやって来たのです。この救い主を礼拝するためにでした。東方の博士たちはどのような人々だったのでしょうか？今日は簡単にしか見ませんが、彼らは星や夢の解き明かしに精通していた者たちです。また、バビロン、今のイラクに当たりますが、その祭司という説もあります。いずれにしろ、あのバビロンという遠く離れた所であって、彼らはどのようなルートであったかは定かではありませんが、この救い主の話を聞き、救い主の誕生を聞き、そして、その救い主を捜し求めてエルサレムにやって来たのです。推測できることは、バビロンはユダの民を率いて、一般に言われるバビロンの捕囚ですが、ユダの民が連れて行かれたところです。そして、多くの者たちがイスラエルの地へと戻って来るのですが、ある者たちはバビロンに残りました。その者たちがこのような神のことを告げたのではないと言われるし、また、預言者ダニエルもバビロンにいました。ですから、いろいろな人たちが彼らを通して神のメッセージを聞いていたことは確かです。どこからこのような知恵を得たのかは分かりません。しかし、この東方の博士たちはエルサレムにやって来て、救い主がどこでお生まれになったのかと、そのことを人々に尋ねるのです。

2節には、彼らがこのようなことを人々に尋ねていたことが記されています。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」、博士たちは最初にヘロデ王のもとに行ったのではあり

ません。なぜなら、1節を見ると「東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。」と書かれているからです。つまり、「こう言った。」という現在形の動詞が私たちに教えることは、彼らはエルサレムの町にやって来ていろいろな人たちに次々と尋ね始めたということです。なぜそのようなことをしたのでしょうか？博士たちはこのエルサレムの人々は間違いなく救い主がどこで生まれたのかを知っていると思ったからです。自分たちは遠い所から旅して来ました。彼らの心は非常な喜び、期待に膨れていました。救い主が生まれたと。ですから、エルサレムの人たちはもう当然そのことは知っているし、だれに尋ねても、「ああ、それはあそこですよ。」と教えてくれるものと期待していました。

でも、実際にはだれもそのことを知らなかったのです。ですから、エルサレム中の人々が「恐れ感った」と3節に記されています。人々は知らなかったのです。悲しい現実です。東方の博士たちがエルサレムにやって来てこのような質問をするのですが、少なくとも、私たちはこのみことばを見ることによって、博士たちがこの幼子に関してどのように考えていたのか、どのように理解していたのか、二つのことが分かります。

◎捜していた幼子に関する彼らの理解

1) ユダヤ人の王

博士たちはこう言いました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は…」と、どのような意味で言ったのでしょうか？一番分かりやすいことは、それを聞いた人たちがどのように解釈したかです。4節を見てください。「そこで、王は、」とありますが、これはヘロデ王のことです。ヘロデ王は民の祭司長や学者たちをみな集めて、「ユダヤ人の王はどこで生まれるのか？」と問い質したのではありません。「キリストはどこで生まれるのかと聞いたのだし。」のです。つまり、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」ということをして直接聞いたのか間接的に聞いたのか定かではありませんが、ヘロデ王はこのことを聞いてすぐに思ったことは「救世主が生まれた」ということです。ですから、この東方の博士が求めていたのは救世主、救い主だったのです。ヘロデ王はユダヤ人ではありませんでした。しかし、ユダヤ人の信仰などに非常に精通した人物でした。彼も様々な所から救い主が生まれるということを聞いていたのでしょうか。それで、彼は自分の周りに民の祭司長や律法学者たちをみな集めて質問をするのです。「キリストはどこで生まれるのか」と。ですから、東方の博士たちがエルサレムにやって来て捜し求めていた人物は救世主だったのです。

2) 全人類の救世主

そして、もう一つ面白いことは、彼らはこの救世主はユダヤ人の救世主であると思っていません。全人類の救世主だと思っていました。ですから、自分たち異邦人がやって来てこの方を崇拝するというのです。彼らはその方を自分たちの救い主として受け入れ崇拝しようとやって来るのです。救世主を捜し求めていた東方の博士たち、感謝なことに、神は彼らを救い主のもとへと導かれます。救い主は生まれました。そして、そのもとに彼らは導かれて行ったのです。

2. 彼らは救い主を見つけた

「星が導いた。」と記されています。2節に「私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」、9節にも「すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。」、これはどんな星だったのでしょうか？いろいろな説があります。彗星だったとか、木星や金星などの惑星が肉眼上一つの星に見える程接近したという、惑星の待望説があります。けれども、私たちはどの説が正しいのかというそのようなことに時間をかけません。なぜなら、それは非常に無意味に思えるからです。

3. 彼らは救い主を見つけた

大切なことは、このように神を求めていた人々に神は間違いなく働きを成されたということです。神を捜し求めていた者たちに、神は手を差し伸べて彼らに示したのです。第一礼拝が終わったとき、私の息子が「他の人にはその星が見えなかったの…？」と質問しました。確かに、だれでも捜し求めるなら見つかるのです。神は他の人も同じように導かれます。なぜなら、この自然界は私たちに神の存在を示します。しかし、それを見ても見ないようにする人々がこの世にいるのです。どのような方法であったかは定かではありません。しかし、神がこのような星を使って、その方法をもって彼らを導かれたのです。すべてをお造りになり、すべてを支配しておられる神だからこそできるみわざです。

エレミヤはこのようなことをいいました。エレミヤ29：13「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つかるだろう。」、ですから、だれでも心から神を求めるなら神はご自身を明らかにしてくださるのです。私たちの問題は神を求めようとしないことです。「そんなことはどうでもいい。ややこしいし難しいから…。」と。イエスはこのようなことを言われました。ヨハネ5：39-40「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わ

たしについて証言しているのです。：40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」、永遠のいのちを得るためにイエスのもとに出て来ない、探さないのです。救いが備えられているのにその救いを求めて出て来ないのです。でも、この東方の博士たちは違いました。彼らはその救い主を捜してやって来ました。そして、神は彼らを導いて救い主のもとへと導かれ、彼らは救い主を目の当たりにする訳です。

3. 彼らは救い主を受け入れた

その後、彼らは救い主を受け入れています。

1) 博士たちの態度

- ・ 2 節「拝みにまいりました。」→礼拝するために、
- ・ 10 節「この上もなく喜んだ。」→大きな喜び
- ・ 11 節「ひれ伏して拝んだ。」→神として礼拝をささげた。

「拝んだ」ということばは敬意を表わす意味もあるのですが、この文脈から明らかなことは、お生まれになったイエスに彼らは神として礼拝をささげています。そして、皆さんもよくご存じのように、使徒たちは人々から礼拝を受けようとしたとき、使徒たちはそれを全く拒否しました。「神だけを崇拝しなければならない。」と教えるからです。ヨハネもそうでした。礼拝に価するお方は神だけです。イエス・キリストを崇拝した東方の博士たち、だれもそれを止めさせようとはしませんでした。なぜなら、このイエス・キリストこそがすべての被造物によって崇拝をお受けになるに相応しい神だからです。

そして10節のみことばがすばらしいのです。「この上もなく喜んだ。」と記されています。直訳すると、大きな喜びでこの上もなく喜んだと訳せるのです。つまり、ここで表現しようとしている内容は、彼らは喜びの絶頂にあった、嬉しくて嬉しくてたまらない、ただ何となく嬉しかったというわけではありません。もうことばで表わせないほどの喜びに満たされていた、その様子を表わしているのです。なぜですか？彼らはこの救い主に、待望の救い主に会うことができたからです。そして、彼らはその前にへりくだるのです。この方を心から崇拝します。彼らはこの救い主を、この世に来てくださった救世主を自らの救世主として受け入れるのです。「イエスは王の王である。真の神であられる。」と、その方を彼らは自らの王として自らの神として受け入れるのです。

2) 博士たちのささげ物

そして、彼らは彼らの信仰を行ないによって明らかにするのです。ささげ物をささげるという行為です。宝の箱から三つのささげ物を取り出したことが11節に記されています。「そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」

- ・ **黄金**：黄金とは王権、王であることを表わすシンボルです。また、王に贈る一番ふさわしい贈り物です。I 列王記10章にはソロモンとその黄金のことが記されています。10：14「一年間にソロモンのところにはいつて来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」、また、エジプトの王パロがヨセフにエジプト全土を支配することを決めたときに、王はヨセフの首に金の首飾りをかけています。創世記41：42「そこで、パロは自分の指輪を手からはずして、それをヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首に金の首飾りを掛けた。」。ですから、この王位に相応しい宝である黄金を彼らはささげるのです。この東方の博士たちがしたことは、イエス・キリストを王として、すべての王として崇拝をささげたのです。
- ・ **乳香**：二つ目の宝物は「乳香」でした。非常に高価なものです。しかし、乳香は常に神への礼拝とともに用いられました。特に、いけにえの祭壇から祭司は燃えた炭を取って来ます。皆さん、想像してみてください。聖所の中で、そして、至聖所への幕があります。その前にこの香の祭壇があるのです。金でできています。祭司はそのいけにえをささげた燔祭の祭壇から燃えた炭を取って、その香の祭壇の上に乗せるのです。そして、その後、祭司はそこに香を振りかけるのです。そうすると、当然そこから煙が立ち上って行きます。天に向かって煙が立ち上って行きます。それは人々の、また自分たち祭司の神への感謝と祈りを象徴したのです。そして、この香は確かに神に対してささげられたのです。そうすると、東方の博士たちが神にささげるために乳香を持って来たというその行為は、彼らがこのイエスを神と認め、神として崇拝したことを表わすのです。
- ・ **没薬**：三つ目は没薬です。これは死体に塗るためのものです。ですから、この東方の博士たちは死ぬために来られたお方であるイエスを崇拝したのです。

彼らはどこからこのような知恵を得たのでしょうか？初めに言ったように定かではありません。しかし、少なくとも、彼らはイエスがいったいだれであり、何を為さるお方なのか、彼らはそのことをよく知っていたのです。2～3世紀の信仰者で神学者でもあったオリジン・アダマンティウスは「博士たちは王については金を、死すべきものについては没薬を、神については乳香をもって来た。」と博士たちの行

為をそのように言い表わしています。今、私たちが見て来たように、まさに、彼らがもって来たささげ物はイエス・キリストがお受けになるに相応しいものでした。イエス・キリストを見事に表わしたものです。彼は王であり神であり、そして、人として来てくださったのです。それは私たちの罪の身代わりとして十字架で死ぬためです。

博士たちがささげた三つのささげ物、私たちはこのみことばを見て次のことに確信をもったと思います。それは明らかに、この東方の博士たちは神に喜ばれる者たちであったということです。神を崇めた彼らは、神を礼拝した彼らは、間違いなく神に喜ばれる礼拝者であったのです。そのように言うことができます。その証拠があります。

◎博士たちが主に喜ばれる礼拝者であった証拠

1) 犠牲をいとわない

彼らは救世主に会うために非常に長い距離を旅して来るのです。彼らは恐らく1600キロ以上も旅をしたのだらうとある神学者は言います。それがどれ程の距離であろうと彼らには問題ではなかったのです。彼らの心の中にあつたのは、何とかこの救い主にお会いしたい、救い主を崇拝したいという思いです。そのような心をもっていると自然に行動が生まれて来ます。周りから見て大変なことと思っても彼らはそう思っていないのです。なぜなら、それは彼らが心から行ないたいことだからです。彼らは犠牲をいとわない、喜んでこの高価なささげ物をささげたのです。

2) 行動に心が伴っている

見かけだけの行為ではありませんでした。彼らは心からこのようにしたかったのです。彼らがささげた物は高価でした。でも、彼らは喜んでそれをしたのです。皆さん、思い出しませんか？ささげ物に関して、パウロはⅡコリント9：6－8で「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。：7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してください。：8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」と言っています。私たちは主の前にすべてをささげるのです。私たち自身もそうです。神が私たちに託してくださっているもの、自分の時間や才能など、私たちがささげ物をするときに覚えなければいけないことは「ささげる心」です。どのような思いをもってささげ物をささげているかです。

A・B・シンプソンというクリスチャン&ミッショナリーアライアンスの設立者がこのようなことを言っています。「東方の博士たちはこのささげ物をするによって、特に、黄金のささげ物をするによってイエスを王および主として認めたのである。」と。そして、面白いことを言います。考えてみてください。「神が貧困だからささげるのではない。むしろ、彼が富んでおられるからささげるのである。神は困っておられるから神をお助けしなくてはならぬという考え方が、クリスチャンのささげ物に対する一般的な思想である。」と。私たちがささげ物をするときに、あたかも神に何か不足があるかのように、これをささげなければ神のみわざができないかのように、神を助けなければいけないと、それが一般的だと言うのです。「しかし、これ程神を侮蔑したことはない。神は決して我々の助けを必要とはしておられない。神は人間の誤った思い上がりやを笑って言う。たとえ、わたしは飢えてもあなたに告げない。林のすべての獣はわたしのもの。丘の上の千の家畜もわたしのものである。世界とその中に満ちるものはわたしのものだからである。」と言います。

私たちが神におささげするのは神に必要なからではないのです。では、何のためにささげるのでしょうか？シンプソンは続けて言います。「ただ、我々の忠誠のしるしとして、また、彼の主権を認めたしるしとして我々はささげるのだ。そして、そういうささげ物だけを神は喜んでお受けくださる。」と。皆さん、私たちが神にささげるのは神を助けているのではないのです。私たちの神に対する信仰の証なのです。皆さんが犠牲的に物事をささげるのはなぜですか？これをささげたなら家計がどうなるかを考えてしまいます。でも、それでも私たちが喜んでささげるのはなぜですか？それは、私たちのその行為は「主よ、私はあなたに信頼しあなたに感謝しています。なぜなら、すべてはあなたが私に託してくださったものですから、私はそれを正しく使いたい。永遠に価値あるもののために使いたい。」として、神にお返しするものだからです。「神はただ私たちの忠誠のしるしとして、また、彼の主権を認めたしるしとして私たちのささげる物を喜んでお受けになる。この意味においてささげるものがささげられない限り、神は決してその供え物を受け入れられないだろう。」と、私たちの心です、皆さん。どんな心で神を崇め、どんな心で私たちが神にささげものをしているのか？です。もし、私たちが東方の博士に質問できたとして、たとえば、「ものすごく高価な物、ものすごい犠牲を払ったのですね。」と聞いたなら、彼らは間違いなくこのように言ったことでしょう。「犠牲って何のことですか？これは私たちの神さまに対する感謝です。」と。

皆さん、そのように神を心から愛する者たち、神を第一にする者たち、そのような礼拝者を神は求めておられるのです。覚えていますか？ヨハネの福音書4章の中でこのように言われました。4：23「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」と。「霊とまこと」、つまり、神の関心は外側ではなく内側だと言うのです。「霊」とは聖霊のことです。私たち自身の内側のことです。私たちの心です。私たちの心が神に対して本当に感謝に溢れて喜びに溢れて、そして、「神さま、本当にありがとうございます。」と、ただその心で神を見上げているのです。そのような礼拝を神は喜ばれるし、そのような礼拝を神は唯一お受けになるのです。

「まことによって」とは神のみことばに沿ったものです。多くの礼拝者たちがいましたが、自分勝手な解釈によって、自分の考えによって礼拝をしていました。神が望まれているのはみことばに沿った礼拝です。神のおことばを通して私たちは神のことを知って行きます。そして、その方に相応しい感謝をささげて行こうとするのです。私たちはその方を正しく知ることによって、その方に相応しい恐れをささげて行こうとするのです。そのような礼拝を神は喜ばれ、そのような礼拝者を神は喜ばれるのです。

今、私たちが見て来たように、この東方の博士たちはまさにそのような人たちでした。彼らの行為は心からのものでした。確かに、私たちから見ると、彼らの行為はすべて犠牲的です。でも、その犠牲的な行為は彼らの感謝の現われでした。ですから、神はこの異邦人たちの礼拝を喜んでお受けになったのです。彼らは救い主を捜していました。神が彼らを導かれました。そして、救い主に会ったときに彼らは心からのささげ物をもって神を崇めたのです。主はそれを良しとされた。主はそれを喜ばれたのです。

《適応》 あなたは主が喜ばれる礼拝者として歩んでおられますか？

どうですか、皆さんの歩みは？クリスチャンであるなら、あなたは神を礼拝する者として生まれ変わりました。主が喜ばれる礼拝を日々ささげておられますか？自我を捨てて、神に喜ばれることを為しながら、神に栄光を帰しておられますか？

これがこの東方の博士たちでした。次に私たちが見るのは、救い主を礼拝しなかった者たちです。

B. 救い主を礼拝しなかった者たち

1. 敵意を抱く : ヘロデ

まず、私たちが覚えるのはヘロデのことです。彼は救い主が誕生したという知らせを聞いたときに、敵意を抱きました。「ヘロデ王は恐れ感った」(2：3)と書かれています。これは心が騒ぐとか動揺する、困惑するという意味です。そして、この救い主の存在がヘロデにとって非常に面白くなかったのです。ですから、7節に「そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。」とあります。何のためでしょう？後に明確に記されています。その子を殺すためです。16節「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかったと、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年令は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」、子どもたちをみな殺す訳にはいかない。だから、確実にその救世主を殺そうと考え、そのために博士たちをひそかに呼んで情報を得たのです。このヘロデ王は非常に猜疑心が強かったと言われています。パークレーはその性格についてこのような説明をしています。「ヘロデの性格には致命的な欠陥があった。それは狂気に近いほど猜疑心が強かったことである。もともと疑い深い性格であったが、それは歳とともに高じて、ついに晩年には「殺意に満ちた老人」と呼ばれるようになった。だれかが自分の権力の座を脅かすと思えば、すぐにその人を葬り去ってしまった。彼は妻とその母を殺し、長男と他の二人の息子も殺害してしまった。ローマ皇帝アウグストスはヘロデの息子であるよりもヘロデの豚である方が安全だと皮肉ったほどである。ヘロデの野蛮で残忍な、そして、歪んだ性格は、近づく自分の死を前にした行ないにも表われている。彼は70歳になって死が近づいたことを知ると、町の中でも一番美しいエリコの町に退き、エルサレムの町で最も著名な人々を背任罪のかどで一括逮捕し、投獄して、自分が死んだ瞬間に全員殺してしまうように命じた。彼は苦々しく言い放った。『自分の死を悲しむ者はいないから、せめて自分が死んだときにだれかに涙を流させてやるのだ。』と。」、このような人物でした。ですから、救い主の知らせを歓迎するどころか、自分の地位を脅かす者として彼を殺そうとするのです。救い主は自分には邪魔者だったのです。

そのような人は今でもたくさんいます。なぜ、このすばらしい救い主を信じようとししないのか？このすばらしい救い主による救いを受け入れようとししないのか？その答えを一つ上げるなら、自分のしたいことができなくなるからです。この方に忠誠を誓うようになってしまうと、自分の思う通りのこと、やりたいことができなくなってしまう、だから、そのような人物を排除しようとするのです。悲しいことに、人間の罪はまことの神を神として崇めないことです。ローマ人への手紙1章にそのことは明らかにされています。1：21-25「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感

謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。：22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、：23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち
に似た物と代えてしまいました。：24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、その
ために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。：25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り代
え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方
です。アーメン。」、このように人間の罪が明らかにされています。神がおられることを知っていながら、
その神を神として崇めない、却って、真の神ではない自分の都合の良い神を神として自分自身の気休め
を得ているのです。神がいることは分かっているのです。でも、その神は自分たちの理想通りの神であ
って欲しいのです。好き勝手に自由なことをさせてくれる神です。聖書の神では困るのです。絶対者で
は困るのです。主、王では困るのです。

ですから、自分の都合で、自分の望みで、様々な神を造り出してしまったのです。昔も今も変わって
いません。ヘロデは救い主がお生まれになることは自分には邪魔でした。そして、彼を葬り去ろうとす
るのです。

2. 無関心 : エルサレム中の人々、民の祭司長たち、学者たち

敵意を抱いたのはヘロデ王だけではありません。エルサレムの人々はどうだったのでしょうか？

1) エルサレムの人々 3節

今、見て来たように、エルサレム中の人々は「救い主が生まれた」ということを聞きました。3節
「それを聞いて、ヘロデ王は恐れ感った。エルサレム中の人も王と同様であった。」、普通はそのようなニュ
ースを聞いたなら行って見ようと思うはずです。でも、だれも行かないのです。無関心です。

2) 民の祭司長たち、学者たち 4-6節

しかも、驚くことは、ヘロデが民の祭司長や学者たちをみんな集めてキリストはどこで生まれるのか
と聞いた時に、祭司長や律法学者たちはちゃんと答えています。旧約聖書のみことばを引用して「それ
はユダヤのベツレヘムです。ミカ書に書いてあります。」と。このように聖書的な知識をもっていた律
法学者たち、祭司長たち、彼らはその知識をもっていながら、しかも、ここにその救い主に会うために
来た博士たちがいるにもかかわらず、彼らは自分たちでその救い主に会いに行こうとはしないのです。

今も同じです。救い主の誕生のメッセージを聞いても多くの人は無関心です。「そんな話はどうで
もいい。自分の生活の方が大切だ。それに忙しいから…」と、悲しいことに、町はそのような人たちで
溢れているのです。そして、彼らは悲しいことに、救い主が来られたという事実は人間の罪のさばき
があることを裏付けるということを知らないのです。さばきがあるから私たちには救いが必要なのです。
その救い主を拒むなら、彼らに待っているのはさばきでしかありません。

今日、私たちは救い主が生まれたというこのニュースを聞いて人々が取った二つの反応と、二つのグ
ループを見て来ました。救い主を歓迎し救い主を心から受け入れてこの救いに与った者たちと、この救
い主を拒んだ者たち。あなたはどちらに属していますか？

《適応》

・あなたはどのようにあなたを救うために来てくださった「救い主」に逆らい続けるのでしょうか？

律法学者や祭司長たちは知識はもっていました。聖書的な知識をもっていたのです。しかし、彼らは
救い主を知りませんでした。確かに、頭では知っていましたが、心ではその方を受け入れていなか
ったのです。このままの状態で彼らが死んだなら、確実に言えることは、彼らは今永遠のさばきである
地獄のさばきを待つゲヘナの中で苦しんでいます。その時にどれ程後悔しても手遅れなのです。

もし、この救い主をお受けになっていない方がいるなら、心からお勧めすることは、この救い主をあ
なたの救い主としてお受けになることです。救い主はあなたのために来てくださった、あなたを罪から
救い出すためです。この方に背を向けてこの方を拒み続けるその罪の生き方を止めることです。主の前
にその罪を悔い改めて、あなたのために来てくださった救い主をあなたの救い主としてお受けになるこ
とです。そして、この神が備えてくださる生まれ変わりをあなた自身のものとして主からいただくこと
です。

すでに、イエスをお信じになっておられる皆さん、あなたに必要なことはこの救い主を喜び感謝する
ことです。あなたが救われたというこの事実をもう一度見てください。全部神がしてくださいました。
救い主を送ってくださり、あなたの身代わりに十字架で死んでくださり、よみがえってくださり、あな
たに救いを備えてくださり、あなたを救いへと導いてくださった、すべて神のみわざです。あなたはど
のようにその感謝を現わしますか？東方の博士たちはこのような行ないをもってその感謝を現わしまし
た。神を第一として、この方のために彼らは喜んで生き続けました。あなたはどのようにご自分の感謝
を現わしておられますか？

救い主は来てくださった。そして、私たちはその救いを喜ぶ者として今生かされているのです。でも、問題はどのようにその感謝を現わして行くかです。主が喜んでくださる、そのような歩みをもってあなたの感謝を表わし続けてください。私たちを罪から救うために、主キリストは救い主としてこの世に来てくださいました。これが私たちの喜びであり、これが私たちに与えられた救いのすばらしいメッセージです。

《考えましょう》

1. 主を礼拝するために大きな犠牲を喜んで払った博士たち、彼らをこのように駆り立てたものは何だったと思われますか？
2. クリスマスであるあなたは、主を礼拝する者として生まれ変わりました。主が喜ばれる礼拝者はどのように生きている人なのかを具体的に挙げてください。
3. 主が望んでおられる礼拝者に、あなたが成長するのを妨げているのは何でしょう？
4. どうすれば、それらの妨げに勝利することができるでしょう？